

コラム第6回「川の流れのように」



<シフトチェンジ>

9月になりました。はじめのうちは学校に「通える」か「通えない」かといった心配があった生徒たちも、徐々に本来持っている力が発揮されるようになりました。これまでは支援される側だったのが、今は未来学園の一員として、ときに他の生徒を支援し、スタッフを手助けする頼もしさを見せてくれています。

通うことへの心配や集団生活での不安が和らぎ、今は進級・卒業に向けて「勉強・授業・試験と向き合う」ことや、進学・就職に向けて「将来に向けた目標設定と行動する」こと、そして普段の高校生活や修学旅行など「学校を楽しみ人間関係を築く」ことに力を入れる段階になってきたと感じています。

<卒業生のその後>

松江未来学園で高校卒業した生徒は、開校9年目の現在までに86名います。そのうち約7割の生徒は卒業後も遊びに来ることがあり、3割強の生徒はことあるごとに「帰省しました」「就職決まりました」「大学でいろいろあって相談に来ました」などと顔を出してくれます。体感的には、帰省時、就職や昇進や出産などの節目、休学や転職など迷いや悩みがあるときに来ることが多いように感じています。変わりなく順調にいて忙しい場合と、あまりにしんどい状況の両極端のときは顔を出不さ（出しにくい）ようです。「ずっと相談できる場所」を理念としている松江未来学園や私としては、しんどいときも顔を出してくれるといいなと思っています。

そこで今回のコラムでは、ゆっくりとでも周囲の環境や関わる人たちと折り合いをつけながら歩んでいくこと、長年立ち止まって停滞しないために何が必要かを考えたいと思います。

<人生が停滞するとき>

誰しも迷うことや悩むこと、ときに立ち止まることもあります。ですが、だいたいの場合それは一時のことで、何年も立ち止まることは稀です。その稀な事態により長期間立ち止まってしまうと、その人はどのような状態でしょうか。例えるなら、日々の生活がそれなりにできている状態は、流れのある川です。一方で生活がままならなくなった状態は、川の端に生じた水たまり、石や泥で流れが遮られた淀みの状態です。

このように流れが遮られた川辺の水たまりのように、人が本来もっている力が発揮されず、目に見えないなにかがその人の本来もつ成長力（流れ）を塞いでしまっていることがあります。塞がれたために流れがなくなり淀みとなり、時間とともに水が濁って油やゴミなどが集まる場所になってしまいます。

<障害を取り除き、流れを取り戻す>

精神療法家ヤーロムは精神療法において「私がしなければならないのは、ただ障害が何なのかを見極めてそれを取り除くことだけなのだ」と述べています。淀んで汚れた川の水をきれいにするとき、ゴミを取り除いたり水を入れ替えたりしても時間とともにまた汚れてしまいます。そんなときは、流れをせき止めている石や泥を取り除き、流れが生じれば自然と水はきれいになります。

この「川」の例えを「人」に置き換えると、家族や身近な人の人生が停滞したとき、その人に働きかけてその人を変えようとする対処療法に頼るばかりでなく、その人を取り巻く環境に目を向けて成長の流れを阻害している根本を理解し、それを取り除いたり緩和することが大切だと教えてくれます。そしてその人本来の生き方の流れを取り戻すこと、変化を生み出すことに焦点を当てることで、少しずつ事態が動き出します。つまり水自体をきれいにしようとするのではなく、その流れをせきとめている「何か」を取り除き、あとは自然に任せる発想です。やや抽象的な話が続きませんが、なんとなくイメージできますでしょうか。

<成長力を信じる>

精神分析家のカレン・ホーナイは言います。「もし成長を阻む障害が取り除かれるならば、人は、まるでどんぐりが樫の木に育つように成熟し、完全に自己実現した大人になっていく」と。まずは「人には本来的に成長する力が備わっている」という前提に立つことが肝心です。当たり前のことのように聞こえるかもしれませんが、つい忘れがちなことでもあります。私も子育てや教育に関わる中で、つい子どもたちの成長力を低く見積もっているなと感じて自戒することがあります。「人には、本来成長する力が備わっている」そして「その人自身に他者や社会と向き合い、やりくりする力がある」と考え、流れを塞ぐものを取り除く視点が、停滞から脱するきっかけをつくると私は考えています。

野中浩一 拝